

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集: FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

◆◆◆ No.0728 ◆◆◆

23/03/01

【ドル/円は2ヵ月連続の荒れ模様、ドル続伸なら140円超に!?】

ドル/円は依然として「大相場」が続いている。昨日終了した2月相場は、月間変動率がなんと8.82円。決して変動が小さくなかった1月を1円以上も上回る結果となった。

日経新聞が「政府、雨宮正佳氏に日銀総裁を打診」などといった観測気球を打ち上げマーケットが混乱をきたすなか、そののち状況は一転。ノーマークの経済学者で元日銀審議委員だった「植田和男氏」に白羽の矢が立ったことで、金融市場では思惑が交錯し、さらに混とんとした様相を呈する結果に。いち市場参加者としては、ボラティリティの高い相場が本日からの3月以降も是非続いて欲しいところだが、果たして如何なる動きとなるのだろうか。

◎過去の3月相場は「一年で一番大きく動く月」、今年も期待は高い

以前からたびたび報じているように、「2022年3月以降のドル/円月間変動幅は8円強」動いてきたが、年が変わった2023年に入って以降も、その流れは続いているようだ。事実、1月の月間変動は7.56円、2月は8.82円となっている。

ただし、今年1月の月足が「気迷い」を示す十字線に近い足形だったことに対し、2月は実体部がしっかりした陽線引け。月間を通してドルの強さが際立つ1ヵ月だったと言えそうだ。

いずれにしても、そんな2月相場を受けた本日からの3月相場は一体どう動くのだろう。以下で恒例になっている過去の経験則を参考に検証してみたい。

まずは1990年以降昨年まで過去33年間の勝敗をみると、17勝16敗。ほぼ互角の結果であり、一般的には「3月決算期末に向けたリパトリエーション」、つまり本邦勢による資金の国内還流など幾つかの需給要因・決算対策もあり円高有利との指摘も聞かれたが、データの的にはまったくドル安・円高が有利とも言えそうない。

ただ、そんな3月相場で興味深いのは、平均すると「一年で一番大きく動く月」であること。典型例は月間10.52円で年間を通しダントツの変動を記録した2020年だが、翌2021年も4.61円の変動でやはり年間トップ。昨2022年は年間2位ながら、変動幅は実に10.45円を記録していた。

今年は1-2月がすでになかなかの大相場だが、経験則的には「今年も…」と思わず期待せずにはいられないだろう。

また3月相場は、ひとつの流れができるとそれに沿った動きをしばらくたどることが非常に多いことも特徴だ。たとえば、2009年から2016年までは8年連続でドル高・円安であり、以降は2017-19年が3年連続でドル安、2020-22年は再びドル高へと振れている。

ちなみに、仮に今年の3月相場が、2020年以降の流れ継ぎドル高に動くと予想したうえで、昨年から続く「月間8円変動」という大相場が続くとすれば、月内に140円はおろか場合によっては145円近くまでのドル高・円安が進む可能性もあるのだが果たして如何に。1日付の日経新聞が「浮上する1ドル=140円説」などと伝えているところは気掛かりだが、現状鳴りを潜めている鈴木財務相や神田財務官などによる「円安けん制発言」が発せられるような展開も!

一方、過去の3月を歴史的な面で振り返ると、興味深い事象が2つ浮かがる。

ひとつは、先にも記したように、日本企業の多くが決算期末にあたるのが影響しているのか、「企業破綻」や「損失公表」といったニュースが数多くみられること。そしてもうひとつは、「為替や金融市場に関する、歴史トピックスも少なくない」ことだろう。

後者についてのみ典型事例を示せば、やはり1933年のルーズベルト大統領による「ニューディール政策」発表だろうが、ほかにも1ドル=360円の固定相場制導入を決定した1949年の「ドッジライン」発表、1953年の日本株大暴落(通称「スターリン暴落」)などのほか、もう少し具体的なマーケット寄りの事象として、「NYダウが初めて1万ドル突破(1999年)」、「ドル/円が1995年に記録した戦後最安値を更新(2011年)

注: 安値を更新しただけで、大底75.57円示現は同年10月—などがすべて3月中に起こっている。

もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるわけではない。しかし、ロシアによるウクライナ侵攻は1年が経過してなお収まる気配がないばかりか、ウクライナのゼレンスキー大統領が先週末に記者会見で述べていたように、「中国が公正な世界の側に付くと信じていた。中国の武器問題は第3次大戦のリスクをはらんでいる」状況だ。北朝鮮情勢も引き続き不安定であるし、まさに何が起こっても不思議はない。ここ最近の金融市場は日米を中心とした各国の金融情勢にばかり目が行きがちで、一喜一憂しているものの、足もと3月は地政学リスクが相場の波乱要因に急浮上する気もしないではないと思っている。(了)

Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved